

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 中国文字改革の諸問題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村尾, 力, MURAO, Tutomu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001724">https://doi.org/10.15084/00001724</a>

# 中国文字改革の諸問題

村 尾 力

## 1 背景

中国で、いわゆる漢字改革・文字改革という意識がめばえてきたのは、清朝末期、ことに日清戦争以後と思われる。いったい中国は、はやくから印度文化に接する機会をもっていた。ことに唐代には印度の言語学の影響をうけたといわれ、その方法を取り入れて中国語音韻の分類や研究が行われた。しかしこのさい、音韻の分類基準を示すため何等かの純音声記号を使用するとか、専門学者の間だけにせよこの種の記号を何か考出するとか借用するということは全く起らなかった。また明末には宣教師によるローマ字の伝来があり、読書人の一部にはこれに関心をもつ者も出たし、後には一部信者間では教会ローマ字による書信の往来も行われたという。しかしこれらの現象は、みな部分的、孤立的な現象に止っており、その背後に、漢字に対する反省とか、ましてや改革という意識など全く存在しなかったと考えられる。漢字に対する反省とか、現状の漢字だけでよいのだろうかという疑念が起ったのは、日清戦争以後であった。高い文化と長い歴史からみればやくから世界の獅子と目されていた中国は、自己とは異質の世界観や経済制度に立脚した列強に伍してみると、実は眠れる獅子にすぎないことが明らかとなってきた。葢爾たる東海の夷・日本に戦敗するに及び、中国は国家的、民族的に反省を強いられるにたち至った。中国の識者・先覚者は日本に注目した。このときかれらの目に大きく映じたものの一に、日本における初等教育の普及があった。そして、かかる普及をもたらした諸原因のうち、言語に関するものとしては、音節文字カナの存在ということがかれらの目に大きくうかび上ってきた。かれらの脳中には、広大な大陸にひしめく文盲大衆の姿と、イザというときにはカナによって意志・知識の伝達を行いうる日本大衆の姿とが深く焼きつけられたのであろう。ここに、文字に対する意

識・反省が起ってきた。漢字のほかに何か補助文字が必要ではないかとの考のもとに、いくつかの補助文字案も考案された（その多くは何等かの点でカナの影響をうけている）。つまりかれらは、教育普及のための文盲対策、これに関連するものとして文字の問題を自覚したのである。

しかし、半封建・半植民地国家と評価されている当時の中国は、この問題を社会的に発展させてゆく条件に欠けていた。文盲の一扫、教育の普及は抽象的には切望されても、中国は、ある知的水準に達した労働者・農民を実際に求める社会体制に欠けていた。かかる要求を前提とする近代資本主義の発展、市民社会の成長という点では、中国は全く後進国であった。一部人士の「上からの」改革案も単に好意に留り、文字問題についても、注音符號の制定(1918年)に留ってしまった。文字改革運動は、学者の書齋裡でその技術的研究という枠内に躡踏せざるをえなかった。

中共が政権をとるに至って、文盲対策・文字問題は再び登場してきたが、それは全く新しい角度からの登場であった。いったい共産主義者は、その政治理論に基いて、文盲という社会現象にはやくから鋭い関心を示していた。その理論によれば、理想とする新社会の建設において最終的に信頼し依拠しうるのは、資産階級の在来の思想・感情に全く汚染されない人々、その残滓を全くもたぬ無産大衆のみ、といえるであろう。また中国当面の教育というものも、資産階級を転覆し階級社会を消滅するための手段であり、革命完遂の武器である、と考えられよう。それは、左右いずれにも可能性をもつ、白紙の如き中立知識人をつくる教育ではなく、生産労働に直結した筋金の通った人間を無産大衆の中に培養し確保してゆく教育である。’56年下半年以降における、各方面での右派との闘争経過が示すように、旧来の知識人に対する思想改造は決して容易なものではない。かくて無産大衆に対する教育、その急速な知的向上は吃緊の要事と考えられる。そしてその大衆は、目に一丁字なき文盲として存在していた。すなわち文盲一扫・教育普及は、新社会建設に不可欠の前提条件といえるであろう（と同時に、その教育観からみて、その内容や程度もわれわれの常識とはかなり異ったものと考えられる）。従って中国の指導者が、文盲一扫とか文字問題を重視する、たとえば首相が施政演説としてこれを大きくとりあげるゆき方

も、如上の政治観に由来する当然の帰結と思われる。

前述のように、旧中国の文化人の間から、中国語をうつす文字として、漢字は本質的に不十分で不都合で不便である、という歎声は起ってこなかった。日本の国学者の一部がとなえたような、日本語と漢語は本質的に異った言語だ、漢語漢字による日本語表記には再考を要する、というような反省や疑惑は、中国には起らなかった。中国で文字に対する反省が起ったのは日清戦後であり、それは狭義の文化上の問題、純言語学内の問題として発生したというよりも、近代的に興国すべき一対策として意識され成長してきたものである。ことに1931年以後のいわゆるラテン化運動に至っては、政治とともに動いたものであり、それは無産革命を目的とする文字を媒介とした政治・社会運動という臭気強い。それは、中国語という言語がいかなる特色をもつものか、これを表記する文字としてはいかなる条件が必要か、欧州に匹敵する広大な中国でその言語と文字はいかにあるべきか等々の問題について、言語学的に文化史的に十分の研究と検討が行われて後にはぐくまれてきた問題というよりも、当面する歴史的、政治的条件に直結して提起された問題であり運動である、とみるべきであろう。

## 2 文盲問頭

中国の文字改革運動は、政治革命のための文字改革として出発し推進されつつある。新建設の基礎たる無産大衆に政治的自覚、筋金を通すこと、目前に迫る工業化・機械化に必要な知識と技術を与えることが必要であり、しかもかれらは全くの文盲として横たわっていた。ここに、「知識程度が低いことは言わずもがな、わたしの言いたいのは、文字すら知らぬということだ」(レーニン)、「人口の8割まで文盲をなくすこと、それは新中国の重要な事業なのだ」(毛沢東)の指示が生じ、文盲一掃・識字運動が要策として登場する。単なる識字運動は国民党治下においても行われたが(1928—43。参加者1千40余万という)、中共治下のそれは上述のように全く異質のものである。中共は政権を手にする以前から、すでに解放地区において識字運動を行っていた(そして文字だけについていえば、ある時期にはローマ字に主力がおかれ、ある時期には漢字によ

って行われた。その理由については、今日なお定説がないようである)。中共の政権掌握後には、運動は全国的に拡大された。

今日行われている掃盲運動の根本方針は、'55年の党大会において、農業合作化その他の経済問題とともに一体をなして規定された。これによれば、第三次五カ年計画('63年始)から農村では大規模な機械化にうつりたい、同計画末には、全耕地面積の47%を機械化工作で行いたい、またそれまでには農村電化も普及したい、となっている。しかるに現実の農民(及び労働者)は、スイッチの開・閉の字すら読めない、労働日の記入すらできない、為替受領の署名もできない、という状態であった。かかる経済計画と現実から、掃盲の方針が割り出された。すなわち当時の農業発展綱要その他によれば、第三次五カ年計画末('67年)までに、農村青壮年(14歳~40歳)の8割、約1億8千万を掃盲する;標準としては千5百字が読め、二三百字の短文が書けるようにする;文盲一掃協会を設け、青年団などと協力して行う;'56年内に予定する農業合作社を母体とし、経費・教師などもこれによる、というのがその大体であった。因みにソ連の文盲一掃は、8歳から50歳までの文盲をなくせとのレーニンの指示が1919年、委員会の成立が20年、今やソ連インテリの八割から九割までは労働者・農民出身によって占められたとスターリンが述べたのが'36年、もはや文盲はいないと公式に宣言されたのが'40年ということであって、つまり前後20年を要している。また農業合作化の発展、生活の向上を示し出した'28年以降は、掃盲も急速に進展した、と伝えられる。

さて中国では、すでに'48年から冬学(冬の農閑期利用の識字教育。冬学自体ははやくからあり、宋の陸游の詩にもみえる)が行われていたが、識字運動として脚光をあびたのは、土地改革が完成した、'52年を中心とする速成識字運動であろう。これは注音符号を用いた短期速成の集団詰込の方法で、大体3百時間に2千余字をたたきこむものであった。軍隊のような集団では一応の効果もあったようで、げんにこれによって識字した部隊出身の自伝作家、高玉宝や崔八娃が出た。また、一時はかなり全国的となったこの識字運動とあいまって、'52年には「常用字表」2千字が公布されたりした(従って、これには決して字種制限の意図などはない)。この速成識字運動は、社会全般の急進主義に対する反

動が起るとともに、'53年下半年以降は下火になっていったようである。'55年から'56年にかけて農工業の生産が向上するとともに、識字運動はまた活発になってきた。前記の掃盲方針もこの間に確定したし、'56年3月には全国掃除文盲協会も発足した。しかし同年春に始るスターリン批判、ついで百家争鳴からハンガリア事変に至る雪どけ風潮は、再び識字運動に停滞をもたらしたようである。つまり、識字運動もつねに時の政治情勢に対応しているのである。

ここで、それまでの結果をみると、'57年末までに文盲を脱離した農村青壮年は約3千万、年間平均250～300万の掃盲といわれている。従ってもしこの調子で進むなら、上述の目標・全1億8千万の掃盲には、なお50年を要することとなり、また上述の予定期限内にこれを達成しようとするれば、'58年以降は年に千7百万の掃盲、つまり在来の約6倍の努力を必要とする、という状態であった。

さて、'57年1年間にわたる整風運動、反右派闘争をへて本'58年になると、中国はあらゆる分野で「大躍進」に入った。農産物では信じ難いほどの増産を示したし、鉄鋼等部門では15年以内に英国に追つき追こすと豪語すること周知の通りである。その実際の可能性は別として、注目すべきはその意欲・熱意であろう。この大躍進風気はまた掃盲運動にも現われてきた。'58年春の党大会を通過した農業発展綱要修正案では、農村での掃盲期限を在来の第三次五カ年計画末年からくりあげ、おそくとも第二次の末年('62年)までに行うように規定した。かくて末端の掃盲運動にも大躍進が開始された。在来でも各種の教学形式がとられていたが、今春からはさらにそれが生産に直接して、いわば一種の生産労働其物として扱われているように思われる。田畑において各種休憩時間を利用して識字学習が行われる。道を歩けば「文化関」（文字の関所）があり、その高札に書かれた文字を覚えなければならぬ、というほどである。教師としては下放幹部（農村に一定期間配置転換されるインテリ。この措置は、インテリの労働化教育のためといわれる）とか、すでに脱盲した前記3千万の人々とか、その他小学生はじめあらゆる識字者を動員しているようである。これら組織の主体は農業合作社であるが、これは'58年夏からさらに人民公社へと発展し、農民の生活様式にも変化を生じてきた。たとえば公共食堂ひとつをとってみても、定時的に必ず集合する農民に対し、各種伝達や啓蒙とともに識字学習を行

う機会は増大したと考えられる。他の大躍進と同様に、よしや不随意的半強制にせよ、文字習得ひいては知識向上も大躍進しつつある。たとえば在来4年間民校に通ったが覚えた漢字はただ20余字という者が、近来わずか半月間に脱盲（約千字習得）した、げに「一日は二十年に相当する」（マルクス）という極端な報道から、苦戦数十日或は二・三カ月で千5百字内外を習得したという報道は枚挙にいとまがない。山西省の例でいえば、この1～6月の間に77万を掃盲（昨57年の8倍半）したといい、また4月には黒竜江省が全国最初の無文盲省たる名のりをあげた（当時同省の各種青壮年のうち、工員の非文盲率86.9%、市民のが82%、農民のが81%となっていた）。かくて7月までに、全国ですでに脱盲したもの4千1百万、学習中のもの1億1千2百万と伝えられる。'62年までに予定の掃盲を完成するには、'58年以降は毎年3千万の掃盲を必要とするが、上述の近来の速度でいくとすれば、目標はあと一・二年で達成されることになる。が、一応覚えた後の復習・強化を考慮し、漢字習得には文盲なら1年、半文盲なら半年（半文盲とは、すでに千字近くまで読めるが、文章はほとんど書けないもの）という経験上の計算にたって、目標達成には今後5～10年とみるのが穏当であろう。

かように一応字を覚えた者に対しては、「読百本、写万言」の標語のもとに種々の読み書き運動が行われ、また近来盛んな大衆による新民謡、社会主義社会を謳歌する詩歌の創作への参加などが伝えられている。また生活上に現われた識字読書の実効としては、たとえば農具の改造とか衛生思想の向上など、今日の全般的技術躍進への原動力が数えられる。

かように、'58年初頭に始まる全分野にわたる大躍進運動、同年夏に始まる人民公社化と「苦戦」を標榜する一層の急進軍は、各方面での生産闘争となって現われているが、それは掃盲識字についても上述の如く現われており、まさに掃盲識字闘争とよぶべきものであろう。現中国にあっては、掃盲や教育事業もその世界観・政治観に立脚して考えられ、掃盲対象・人員・内容が計画され、その学習は「闘争」とし「苦戦」として行われている。人民公社について、西欧側、ことに米国では、「それは個性を否定する。そこでは人間は、単なる material unit としてのみ扱われる」云々と批判している。西欧の個人主

義なり自由観に立っていえば、この評語は、掃盲識字運動にも言及しうるものかと思われる。しかし、異った社会制度と自由観に生きようとする人民中国が、掃盲識字・教育普及の点で、西欧とは全く異なる手段にうったえるのは当然であろうし、その効果も必ずしも小さくはないであろう。たとえば「試験田」での豊収は、農民のもつ旧来の既成観念を打破したし、また多くの創造性と自信とを作り出した。こうした新しいものへの可能性の意識と信念は、漢字による識字教育においても、ある程度反映するものと思われる。もちろん上述の如き統計数字そのままにはゆかないであろうが、しかし新しいタイプの農民労働者インテリを培養する点でも、かなりの「躍進」をもたらすかと考えられる。

こうした表面的躍進は別として、漢字学習という面からみれば、いわゆる復盲現象（漢字を忘れ、もとのモクアミにもどること。定説ではないが在来40～50%などといわれる）が果してどの程度のものか、今日のところ明かではない。文字の点からみて、たとえば漢字かローマ字かという論争について、上述の掃盲運動は何の結論も提供していない。また、英米における例などをひきつつ、文盲現象とは経済問題であって生活の向上とともになくなるものであり、文字（漢字かローマ字か）の比重は小さいのだとく説に対しても、今日までの掃盲は何の結論も提供していない、とみるべきであろう。それは、今後の社会における農民の実際の文字必要度と中国語の特質・変化とにかかるところであろう。

以上掃盲運動の概略からも明らかのように、中国の識字運動は政治的経済的高まりとともに消長しつつ進んできた。文盲たる無産大衆を開眼し政治のラチ内に参与させ、これを基盤に強大な新社会を建設することは、すでに四十年の歴史をもつソ連という先例がある。中国における文盲一掃問題は、民族の将来を左右する政治・社会問題であり、その進展が時の政治・社会状況に敏感に対応すること上述の通りである。中国における文字問題、漢字改革・文字改革も、この点を枢軸として考察するべきものであろう。

### 3 文字問題

文盲対策、大衆への教育普及に関連して、文字自体に関する問題も学者の書齋裡から生きた社会へと動き出してきた。それは一部人士がいうような「文化

現象であり、政治を離れて扱われるべきもの」ではない。そして今日の具体的な問題としては、現行の漢字形式（一語一音節一方形）内における整理改造の問題と、全く別個な文字形式に移行する問題と、つまり簡体字とローマ字化の問題がある。

簡体字いわゆる略字は、はやくから発生していた。いったい漢字の構成、ことに形声という構成法は、本来異体字を生じうるものであった。今日の民間略字で挙例すれば、婦に対して妘・嬪・妇などの略字がある。中国語を話す中国人に対して、妘や嬪が「女に関する fu 音の語」を想起させることはきわめて当然である、また単なる字形簡略の妇の類が発生しやすいことは今日の日本人も経験するところである。こうした異体字のうち特定の一字以外を、(価値判断を加えて)俗字とか、(画数などからみて)簡体字とよぶなら、簡体字は漢字の発生とともに発生するものであり、戦国時代の六国異文もその一例であろう。しかし時の流れは、或語に対して特定の文字を固定するようになった。さらに強大な中央集権国家が国家の名において行う試験(科挙)や諸統制は、漢字字体についていわゆる正字俗字の観念を醸成した。日中ともにごく近来まで、清朝勅撰の康熙字典が典範とされ、古字や大衆通行の略字は規範の設定に参加しなかった。しかし簡体字は、未公認ながら実際には多く使用されていた。年羹堯はその上書中に「五穀豊登」(五穀=五穀。現中国も穀→谷)と書いたため康熙帝に不敬扱いされたが、当の康熙帝は「嫌疑」を「嬾疑」(同音通用)と書いたと伝えられる。簡体字は、手書の帳簿・処方箋の類だけでなく、敦煌遺品から清末の通俗文芸木版本にまで現われていた。日本の当用漢字で一二をいえば、万はすでに漢代に、乱は六朝に、婁は唐代に、独・寿・宝・声などは宋代にみえている。こうした現実には抗して、画の多い格好のとりにくい繁体字が正字と規定され、これに権威と伝統が与えられていたのである。人民中国となって、旧来の権威が否定され、価値の転換が行われ、われわれは新しきものを創りうるのだという意識の勃興とともに、簡体字は晴れの舞台に乗り上げてきた。それは、過去とは一応絶縁した新しいものとして横行し、時には怪字まで発生した(一音節一方形なる形式をこえ、芹(共産党)・邗(幹部)の類も出た)。この混乱の整理のため、政府が規準を制定することは当然であり、人為的改革の

意図をも加味しつつ'56年以來の漢字簡化政策となつて行われている。それが、  
在來の漢字形式内に留る文字であること、歴史的に基盤をもつものであること  
を思えば、簡体字の普及は比較的無難に行われるであろう。そして、画数を減  
じた簡体字が文盲の識字において能率をあげていること（たとえば農業豊産→  
農業丰産の如き）論をまたない。

しかし、いわゆる簡体字の多くは単に筆画の減少であつて、今日の漢字対策  
として要求される字種の減少・制限の点では大きな効果はない。政策としてこ  
の点を強調するあまり、現行の簡化方案にはかなりの同音代用（僕→仆、像→  
象の類）が採用され、字種の制限が意図されている。同音代用という事実は  
（e. g. 鞦韆→秋千）はやくからあつたが、それは個々の特定の語について行わ  
れたものであつて、これを一律全面的に応用するのはかなり問題があらう。古  
典とは断絶する決意にたつても、漢字がいわゆる表意文字・表語文字である以  
上、同音代用には限界があり、これによる字種制限には大きな期待はかけられ  
ないであろう。字種制限を除き、主として筆画簡化という点からみれば、簡体  
字の普及は時間の問題と思われる。〔簡体字については、国立国語研究所年報9、東  
京支那学会報第1号、4号などを参照されたい〕

漢字に対する反省が文盲対策に由来すること上述の通りであり、従つて漢字  
への批難は主として教育上の問題、その習得応用に時間を要するという点から  
行われる。すなわち、漢字が語音に直接しないこと、その字種が多すぎるこ  
とが問題となる。ここに、漢字の表音化及び中国語の表音文字化が考えられてき  
た。くりかえしていえば、この要求は、大衆識字における漢字学習の難という  
事実から出発しているものであつて、中国語を表記する文字として漢字はすで  
に腐朽の極に達しているとか、漢字の今日までの変遷の傾向をたどれば、それ  
は漢字形式から離脱して音素文字に突入するものだという何か確立された理論に  
よつて起つてきたものではない。しかし同時に、習得応用の難（さらには生活  
の能率化、文字機械化における難）が存在するのも敢然たる事実である。ここ  
から各種の改革案が考えられているのであり、従つて、主張されている表音文  
字化についても、将来は独立単行する全面的正式文字としての表音文字を説く  
立場と、単に一種の補助文字、ふりがなとし或はある分野と範囲内では独立通

行するカナの如きものとしてそれを説く立場とがありうるわけである。

言語の面からみれば、中国語は単音節的な孤立語である。一語を（中国人の意識における）一音節で把握し表現しようとする本質は、今日の中国語でも変わらない。陸志韋によれば、北京語の音声言語における単音節の語は約千二百となっている。これを多すぎるとみるか否かは立場によろう。しかし中国人は、単音節を堅くまとまった独立せる一塊と意識するものだ、とはいえるであろう。孤立させて語をみた場合いわゆる同音異義現象が生ずるのは、本質的なものと考えられる。さらに、中国語は語形変化をもたない、たとえば、「書く」が kak—a, —i, —u となる如き変化をもたない。つまり表記上に、こまかな音韻の記述を必要としないのである。〔上記二特質はからみあって、いわゆる造語の容易・表現の簡・音調の美などを生み出す。それは日本語中の漢語でも、時には語順まで含めて応用され、たとえば展覧会出品・対共産圏禁輸品・航宙学の如く使われること周知の通りである。ただこれに対する価値判断はまた別個の問題である〕。従って、もし一語だけを孤立して表記することを考えるなら、中国語の純表音文字化はまず不可能であろう。日本語において、ヒ（日・火）やハ（歯・葉）を孤立して表音文字で表記するのと同様である。これに対してはさらに何等かの符号を必要とするであろう。かくて唐蘭などは、形声文字における声符の部を注音符号でおきかえる「新形声文字」を考えた。日本語になおして挙例すれば、近来一部で行われる略字、杵・許・杵・序・序（機・議・権・摩魔・屋）等に当るものである。つまり漢字に対する表音化という要求と、中国語の上記特質とを折衷した案であった。ただこの案は、結果的には余りにも人為的新字という傾向が強いものとなり、今日ではほとんど顧みられていない。しかし、漢字形式内での表音化という意図と理論は、尊重さるべきものと思われる。

以上の如き漢字の改革改造とは別に、純表音文字を説く主張がある。現実の言語生活では、語は個々に孤立しているのではなく、そこには文脈が構成されその他の条件も加って、意志の疏通が行われている。文字による文章の世界でも同様であって、同音異義による混乱は技術的に（特殊な綴り方）解決しうる程度のもので、中国語の表音文字化は可能だ、と主張する。かくて考えられた文

字のうち有力なものは、注音字母とローマ字である。前者は人為的に作られたものではあるが、すでに40年の歴史をもっている。しかし各字形が余りよくできていないこと、語形の構成も視覚的にすっきりしないこと等のため、本来漢字から出た民族形式ではあるが、今日では勢力を失っている。結局残るものが他国におけると同様ローマ字であることは、今日周知の事実である。しかし中国語の全面的表音文字化には、なおいくつかの問題がある。たとえば、音声言語とは次元を異にすると考えられる文字言語において、上述の特質をもつ中国語は表音文字によってどの程度に表現されるものか、今日までの語圏や文体は漢字に立脚するものが多いが、これをいかに改造するか、また単音節意識（一音節）にたつ発想法を変えうるか否か、現在のみでなく将来も考えうる方言分岐の問題をいかに解決するか等々の問題があり、さらに古典・文化遺産との関係とか、ローマ字を洋文鬼字とみる一般感情の問題等もひかえている。これらの問題に対する解決の理論と方法が予見されぬ限り、中国語の全面的ローマ字化は、よしや強大な権力によって推進されるとしても、まず実現不可能かと思われる。今日具体的に考えうることは、五十年なり百年なりを単位として、特定の分野・対象をえらんで部分的に表音化を試みてみることであり、またその前提として、表音文字化への関心を喚起する運動を起すことであろう。

従って今日要求される表音文字とは、さし当っては補助文字としてのそれとみるべきであろう。漢字習得上から生じた漢字不表音の難、この点への対策としてのローマ字論であろう。すでに文盲識字教育において、まずローマ字を教えることによって漢字学習の効果を高めたとか、学習後の復盲はローマ字利用によってある程度防ぎうる、という報道は少なくない。今日考えうるローマ字の現実的価値は、この段階のものといえる。

以上みてきたように、漢字簡略化は多少の技術的曲折はあっても当然推行されるであろう。それ以後の文字改革は、新社会の基層である無産大衆が新社会にあってどの程度に文字を必要とするものか、簡体字による漢字学習が政治的高潮によってどの程度にまで強固となり、新社会での生活の必要をみたしうるか、という条件にかかるであろう。ローマ字が、単なる補助文字から一步を進

め、まずは特定の分野における初等程度の内容の伝達にまで独立して使用され、まがりなりにも漢字との二本立体制が試行されるか否かということは、こうした政治的・社会的条件にかかっていると思われる。 (1958. 10. 31)